国立大学図書館における

医学図書館（その周辺）

特集： 医学図書館における
電子計算機の利用

鎌 倉 利 男*

はじめに
新制大学と図書館
医学図書館の位置
医学教育の特徴
医学図書館の特異性
（１）部局性
（２）対境性
医学図書館の将来
（１）境界領域学問の資料
（２）情報の拡散に対処して

は じ め に

医学図書館の実態や諸問題、機構の関係、制度的に本館対分館の立場で、仕事の領域や適否について、全学的な目標と現実のギャップ等。既に多くの専門識者から精緻な論説やら卓見が述べられているが、思いつくまま、断片的に、何等体系を求めず記した。

新制大学と図書館

大学の性格や内容は従来の概念では、想像もつかぬ程、急テンポに改められ、大学の体制は知識を授ける側の意思だけでは、成立し得ないのが現況である。例えば大学紛争に見られるように師弟の関係において、研究や教育のあり方において、また大学の運用方式において、大きく内容を変えようとしている。大学に見られるこうした現象を C. カーはマルチバーシティ (Multiversity) と呼んでいる。

現在日本における大学の様相は、まず大学の大規模化に見られる。第二には少数精鋭が学問をする場であった大学は大衆化し、そして第三の様相は内容の多様化である。今、学問の分化を学部の種類数から見ると旧制大学当時 12 種類に固定していた学部種類は 279 種（国立昼間部）の多数に及んでいる。

この結果、大学の教育は量的に拡大され、反面質的な低下を来たしている。このために授業や講義の仕方は特別な配慮を必要とし、学習に協力する図書館の役割は当然加重されなければならない。今後大学図書館は奉仕対象となる学生の増加と彼等に利用を提供する図書資料は巨大化する。これに対処して読書環境の設備や運用にサービスの方法を検討せねばならないであろう。

医学図書館の位置

長々記すまでもないが、国立大学における医学図書館は官制上「付属図書館の分館」であって、付属図書館長の系統下に位置し、付属図書館の「事業を分担する」という関係に位置付けられている。

しかし、事実は医学部長に隷属する医学図書館であって、いわゆる部局図書館として、独自の主体性をもった独立図書館である。付属図書館と医学図書館間には工作上、有機的な関係はなく、現実な分館ではない。

他方、付属図書館はたまたま中央館または本館と呼ばれているもので、実際は大学事務局に奉仕する一つの部課の体をなし、仕事の領域を見ても、本来中央館たる全学的な立場で、調整連絡機能を果していないのが実情で

* Toshio KAMAKURA 信州大学教養部図書館

ある。国立大学図書館における医学図書館は多かれ少なかれ、このような関係にあるといっているであろう。

沿革上医学図書館は旧制医学専門学校ないし医科大学の付属施設として運営された。戦後学制の変革にともなって内容は著しく変わり、教養課程と専門医進課程をもつ6年制の新制大学として発足し医学部に従属し今日に至っている。

この間医学の進歩、技術の革新、情報の革命の時代に対応し、よく特質ある図書館として改革に順応して来ている。

近時、巷説に文部省の文教政策や建築行政上の一環策として、同一台地にある分館は凡べて一部の機能を残して、付属図書館長の直接監督下におき、資料を集中して運用せんとする案を医学図書館に適用しようとする企画はどうであろうか。今後大学図書館の体制を決める重大なる課題といわなければならない。

医学教育の特徴

わが国の医学教育は19世紀ドイツの大学に範をとり、教育の目的は医師として職業倫理に徹した人間形成と専門技術の修得であった。その教育方法は、支配的な技術を体得した教授と学生との直接人間的な関係から生ずる学習と陶冶であって、この人間関係は師範と弟子の間柄に捉えることができたといっている。

医学の研究態度は臨床的手段と経験的、方法的、実証的な方法を以ってアプローチしようとする点に特徴付けられている。

授業は基本的な認識課程に立つ講義と具体的事例・症例に取り組む実習実験することから成り立っている。

臨床教育は学生を少人数のグループに分け、付属病院において、実際に患者に接する実習訓練の方法をとるのが普通である。

医学図書館は以上のような教育的背景から出発した図書館利用の活動に見られる。普通

医学部にあっては、自己の所に部局図書館(室)をおき、専門分野の図書を持ち込む場合が多い。これは実験・実習・臨床のかたわら併せて専門書を読むという利用の仕方によるものであって、当然認められるものである。

更に触れたいのは、今の制度の医学教育の計画である。医学は学問体系に即した縦割組織であるのに、教養課程の組織は教育内容からいって、教養部に委ねられ、全学的な横割組織によってカリキュラムを組まれている。この教育的構成は統一を欠き複雑化されている。

大学教養部が受持つ一般教育と学部が実施する専門教育との組み合わせ6年間の教育プログラムの編成は学生の図書館利用に関して教養部図書館と医学図書館の主体について問題を残している。

医学図書館の特異性

(1) 部局性

医学教育には臨床教育の必要から付属病院をとまなうのが普通である。本来病院の設置は地域社会と密接な関係を有し、患者の利便を無視しては存在し得ない。このことは大学本来の教育目的のみによって律し得ない要因を内在している。従って病院と深い相互関係を持つ医学図書館のあり方は全学的な集書条件より、病院側の利用要素によって決定され、部局的な特徴を認めねばなるまい。

(2) 対境性

医学図書館には対境性がある。おしなべて、経営体には、内部の活動組織と外部との関係活動がある。

医学図書館は本来使命の達成上、密接な連繫を保ちながら、お互の地位の向上に役立てる友好・利害団体(Interest Groups)ともいふべきものがある。その主なるものを挙げると、

県医学会・地方衛生機関・医師団・製薬会社・日本医学図書館協会とその加盟館等

総じて、これら団体との関係(Off-Campus Relations)の多くは財政的な要素の外ドキュメントの性格を持つ、例えば病院の研究・調査；診断・治療につき新しい技術と方法論の提供、薬材の開発と使用の能否等。

また公衆衛生・消毒・公害・諸法規の適用・制限に関する有力な意見の具進。国内外の商業貿易に関する判例や政府機関の報告。国際会議や内外学会の参加、報告等、多くの情報の提供者である。

ちなみに Keys 氏はこうしたサービス機能を中心に、一般図書館との差異を挙げ、大学医学図書館は商業的、市民的性格を有する図書館であることを指摘している。

医学図書館の将来

(1) 境界領域学問の資料

この問題を資料の機能的管理の問題として捉えてみたい。近時学問の多様性は専門的学問の細分化から来ると同時に各分野間の関連が密接になりつつある。(その最も典型的なものの例は化学と物理と生物の境界線上の学問である化学物理、生物化学等、このような境界線上の学問を境界領域の学問と呼んでおく)研究者が彼の専門分野で、独創的な業績をあげようとするとき、広範囲な資料に向わざるを得ないが、分散された場合利用し難いため、これが対策として「主題別部門計画」が考えられるのである。

これの実現に際しては、場所や施設・建物等財政的処置と経営、管理系統等幾つかの問題を克服することが条件となろう。結果的には①主題部門別な複本を惧れず無限に拡大して行か、②小さく不完全なままで止めるか、この理念は終極において部局図書館的なユニットの延長になりかねない。

本来の中央館と分館との仕事の領域からいえば、主題別の色彩のうすい一般的参考部門を(教養課程の行なう Finding Reference を除く)中央館に移すか、不完全な形で学部部局図書館に残留さすか、理想的・理論的には

幾多の問題を残すであろう。

今後医学図書館におけるこの種、境界領域学問資料の集書は複本を惧れることなく拡大すべきであり、医学に従事する教授・研究者は勿論大学院学生に対し、各々の要求に応ずるべきであろう。

(2) 情報の拡散に対処して

増殖作用をとまなう情報の拡散は収集の方法において、情報の伝達のテンポにおいて、図書よりも、学術雑誌に、更に歩幅を進めて学会・報告文献・レポートに伸びている。多くの分野で情報の全体性を求め正しい見通を立てるために包括的なものを取り上げたい。また情報を「できるだけ速く」伝えて欲しいというのは、早ければ速い程意思決定に効果を発揮することができるからである。

主として医学や工学技術部門にあつては、「書誌・目録の作成と活用」という着意から一部はコンピューターによって、各文献が検索しやすい記録単位になって機械的に集収され、分類され、索引に印刷される、必要に応じて取り出される。という Index Medicus や MEDLARS の開発は世界から大きく評価されている。この方面の対策こそ今後与えられた医学図書館の課題である。

<参考文献>

- 大学の効用 C.カー著：茅誠司監訳
大学の未来像 J.A. パーキンス：天城 勲・井門富二夫訳
大学の理念 カール・ヤスバース：森昭訳
新制大学発足当初における；一般教育の理念：黒田孝郎〔北海道大学教養部：研究報告資料第2輯〕
新制大学の特色と現在の問題点(特に教育機関としての観点から)相馬純吉〔北海道大学教養部：研究報告資料第3輯〕
大学図書館の近代化をめざして 東京大学付属図書館改善記念論集
厚生補導 11 (1968)
大学資料 No. 28 (1968.7)
図書館界 V. 13 特集：大学図書館の諸問題